

第9回 『増鏡』

次の文章は、亀山上皇の出家後、皇后の一人であった中務の宮の御女について記したものである。これを読んで、後の問に答えよ。

中務の宮の御女は、もとよりいとあざやかなる御覚えなりしかば、世を捨てさせたまふきはまでも、とりわ

きたる御名残もなかるべし。禅林寺の上の院の、人はなれたる方に据ゑきこえさせ給へれば、ことにふれて、い

と寂しく心細き御有様なるを、おのづから言とひきこゆる人もなし。源氏の末の君に、中将ばかりなる人、院に

親しく仕うまつりなれて、家もやがてそのわたりにあれば、程近きままに、をりをりこの宮の御宿直など心にか

けてつかまつるを、さぶらふ人々もいとありがたくもと思ふ。宮の御方は、この比いみじき御さかりの程にて、

まほにうつくしうおはしますを、あたらしう見奉りはやす人のなきことと思ひあへり。

七月ばかり、風あららかに吹き、稻妻けしからずひらめきて、神鳴りさはぐ。常よりも恐ろしき夜、はかばか

しき人もなければ、上下いとあはたたく、心細う思しまどふ。法皇は、亀山殿に過ぎにし頃よりおはしませば、

近きあたりにだに人の気配も聞こえず。あはれなる程の御有様にて、墨をすりたらむやうなる空の気色のうとま

しげなるを、ながめさせ給ふほどに、例の中将、そぼちまわりて、侍めく物一、二人、弓など持たせて、「御宿直

つかまつらせ侍るべし。なにがしも、侍のかたに侍らん」など申すにぞ、いささか頼もしくて、人々なぐさめ給

ふ。おはします母屋にあたる廂の勾欄におしかかりて、香染めのなよらかなる狩衣に、薄色の指貫うちふくだ

めるけしきにて、しめじめと物語しつつ、いたう深け行くまで、つくづくとさぶらひ給へば、御簾の中にも心づ

かひして、はかなきいらへなごきこゆ。あか月がたになりぬれば、御几帳ひきよせて、御殿ごもりぬるかたはら

に、いと馴れがほに添ひふす男あり。夢かやとおぼして御覧じあげたれば、「年月、思ひきこえつるさま、おほけ

なくあるまじき事と思ひかへさひ、こころ忍ぶるにあまりぬる程、ただ少し、かくて胸をだにやすめ侍らんばか

り」など、いみじげにきこゆる、はやうありつる中将なりけり。いとうたて、心憂のわざやと思すに、御涙もこ

ぼれぬ。近き手あたり御もてなしのなよびかさなど、まして思ひしづむべうもなければ、いといとほしう、ゆく

りなきこととは思ひながら、残りなうなりぬ。身のうさの限りなうもあるかなど、前の世もうらめしう、いふか

ひなき事を思しつづけて、よよと泣きたまふさま。いよいようたし。見るとしもなき夢の直路をうち驚かす鐘

の声・鳥の音も、人やりならぬ心づくしに、え出でやらず。

語句

。きは「際」(名)空間的・時間的な限界・境界を指す

①(本文では)とき。場合。②家柄。身分。

。こととふ「言問ふ」(動)①ものを言う②質問する③訪れる

。やがて(副)時間的にも状态的にも隔たりがなく、

前に引き続くさま。

。なかり「盛り」(名)①活動力や勢いが盛んなさま。その時期。

②人間として充実してゐるさま。その時期。

。あたらし「惜しい」(形)惜しい。もったいない。

。けしからず「怪しからず」(形)「怪し」を打ち消すことで、

「けしどころではない」はなはだけしだい、という理解

①異常だ。異様だ②はなはだし

。はかばかし「果果し」(形)きちんとしてゐる

。そばつ「霽つ」(動)①ぬれる②雨などがしきりに降る。

。ぶくだむ「自つ四」(髪)髪のもや和紙がけばだつ、

つくづくと(副)①しみじみ人物思いにふけるさま

②ぼんやりすることなく寂しいさま③よくよく念を

。おぼけなし(形)①身のはどをわきまへない②畏れ多い

。助動ハ四型(上代語)四段動詞の未然形に付く。

①何度も繰り返す動作の反復②くしつづける(継続)

。もてなす「もて成す」(動)①処置する②ふるまう

③世話をする。待遇する。

。なまびかなし(名)へなまなまするの「なま」

ものやわらかで優しいさま。またつやなまさま。

。のこりなし「残り無し」(形)余すところがない。

。らうたし「労たし」(形)かわい

。しも(副)①それそのもの(強意)

②よりによってに限って特にその事柄をとりた

。こころづくし「心尽くし」(名)いろいろと物思いする

気をもむこと。